

## 独思録：「バンクーバー冬季五輪」(2/21)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

バンクーバー冬季五輪が始まり、一週間が過ぎました。スケート競技で3つのメダルを獲得し、国内では号外が発行され、選手の活躍に沸き立っています。しかし、札幌や長野の冬季五輪を知る者にとって、その活躍ぶりには今一つの感は否めません。

長野冬季五輪の直前に、メルボルン夏季五輪の時のスピード水着と同じ様に、スラップスケートがスピードスケート界を席卷し、500メートル・スピードスケート競技では、それをうまく使いこなしたが否かの差によって、一方は金メダルを獲得し、一方は惨敗したというドラマがありました。

今回のバンクーバー冬季五輪では、目立った競技器具・ウェアによる問題は起きていませんが、裏では、選手だけではなくメーカーの競い合いが以前に増して激しく行なわれていると思われます。

寺田寅彦の「物理学と感覚」を借りれば、

「少なくともメーカーは従来一流選手の経験的事実の要求に応じて、競技器具・ウェアの内容に、たびたび改善あるいは修繕を施して来た。これらの経験的事実の集まり方は、それまでの勝負に無関係ではない。甲の事実、乙丙の事実の発見を促す。しこうして乙が先に発見されるか丙が先に発見されるかによってその次に来る丙丁の事実の解釈を異にする場合は可能ではあるまいか。

それはどうでもよいとして、一つ極端な想像をして見ればメーカーの今の改善せんとしている事を説明する事ができよう。すなわちかりにここに微小な一流選手の感覚があつて、一流選手の間立ち交じり、感覚と肉体の運動を一致されることを目睹（もくと）しているが、その感覚は物理的距離以上に結果に影響すると想像する。

このような一流選手の感覚が、吾人（ごじん）のと同様であれば吾人の心身的現象の説明は比較的容易であろうが、実際、開発メーカーのその後の売り上げに関わる説などが、今日の競技器具・ウェア開発競争の勢いを得て来たことから考えても、一流選手における採用を促す効果の方則を一般に消費される商品の宣伝効果の方則と同じものとは考えがたい。そうすればこの根本的消費者の購入心理の方則は吾人の方則とよほど違った発展をするに相違ない。

前に選択といったのは必ずしも吾人にとって選択の多様化などという意味ではない。ただ一流選手という特別なものの便宜を標準として一般消費者に対する購買意欲を高揚するという意味である。それでこういう意味で現在の冬季五輪におけるメーカー力学はたしかに人工的な造造物であつてその発展の順序にも常に人間の要求や歴史が影響する事は争われぬ事実である。

一流選手の感覚を無関係にするという事は、おそらく単に一つの見方を現わす見かけの意味であろう。この簡単な言葉に迷わされて感覚というものの基礎的の意義効用を忘れる

のはむしろ極端な五輪中心主義でかえって一般消費者を軽視したものとも言われるのである。」

と言えないこともないのではないのでしょうか。

今回、男子フィギアスケートで怪我による一年のブランクを乗り越えて銅メダルを獲得した高橋選手が、このバンクーバー冬季五輪を最後に引退するのではとの憶測が流れましたが、結局は、来年の世界選手権で金を獲るまで一線を退かないと宣言しました。また、銀と銅を獲った長島圭一郎選手と加藤条治選手はどうするのでしょうか。

スケルトンで今回引退した越選手は45歳、それから考えるとまだまだ若い3人、これからこそ、メーカーのコマーシャルリズムに関係なく、楽しみながら第一線の選手として活躍して欲しいものです。

札幌冬季五輪						長野冬季五輪					
順位	国・地域	金	銀	銅	計	順位	国・地域	金	銀	銅	計
1	ソビエト連邦	8	5	3	16	1	ドイツ	12	9	8	29
2	東ドイツ	4	3	7	14	2	ノルウェー	10	10	5	25
3	スイス	4	3	3	10	3	ロシア	9	6	3	18
4	オランダ	4	3	2	9	4	カナダ	6	5	4	15
5	アメリカ合衆国	3	2	3	8	5	アメリカ合衆国	6	3	4	13
6	西ドイツ	3	1	1	5	6	オランダ	5	4	2	11
7	ノルウェー	2	5	5	12	7	日本(開催国)	5	1	4	10
8	イタリア	2	2	1	5	8	オーストリア	3	5	9	17
9	オーストリア	1	2	2	5	9	韓国	3	1	2	6
10	スウェーデン	1	1	2	4	10	イタリア	2	6	2	10
11	日本(開催国)	1	1	1	3						

### 寺田寅彦「物理学と感覚」

人間がその周囲の自然界の事物に対する知識経験の基になる材料は、いずれも直接間接に吾人の五感を通じて供給されるものである。生まれつき盲目で視神経の能力を欠いた人間には色という言葉はなんらの意味を持たない、物体の性質から色という観念をぬき出して考える事がどうしてもできない。トルストイのおとぎ話に牛乳の白色という観念を盲者に理解させようとしてむだ骨折りをする話がある。雪のようだと言えはそんなに冷たいかとかたえ白うさぎのようだと言えはそんなに毛深い柔らかいのかと聞きかえした。

..... < 中略 > .....

少なくともわれらは従来経験的事実の要求に応じて、物理学的概念の内容にたびたび改革あるいは修繕を施して来た。これらの経験的事実の集まり方はそれまでの歴史に無関係ではない。甲の事実、乙丙の事実の発見を促す。しこうして乙が先に発見されるか丙が先に発見されるかによってその次に来る丙丁の事実の解釈を異にする場合は可能ではあるまいか。それはどうでもよいとして、一つ極端な想像をして見れば自分の今言わんとしている事を説明する事ができよう。すなわちここにここに微小な人間があつて物質分子の間に立ち交じり原子内の電子の運動を目睹(もくと)しているがその視力は分子距離以外に及ばぬと想像する。このような人間の力学が吾人のと同様であれば吾人(ごじん)

の原子的現象の説明は比較的容易であろうが、実際素量説などの今日勢いを得て来たことから考えても原子距離における引斥力の方則をニュートンやクーロンの方則と同じものとは考えがたい。そうすればこの原子的人間の物理の方則は吾人の方則とよほど違った発展をするに相違ない。

前に選択といったのは必ずしも吾人にとって選択の多様なという意味ではない。ただ人間という特別なものの便宜を標準として選択するという意味である。それでこういう意味で現在の物理学はたしかに人工的な造営物であってその発展の順序にも常に人間の要求や歴史が影響する事は争われぬ事実である。

物理学を感覚に無関係にするという事はおそらく単に一つの見方を現わす見かけの意味であろう。この簡単な言葉に迷わされて感覚というものの基礎的の意義効用を忘れるのはむしろ極端な人間中心主義でかえって自然を蔑視(べっし)したものとも言われるのである。

(大正六年十一月、東洋学芸雑誌)



<寺田寅彦(1878-1935)>

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区(現在の千代田区)生まれ。東京帝国大学卒。

航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学(教授)等に所属、大正12年(1923)45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風等の調査に従事。漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

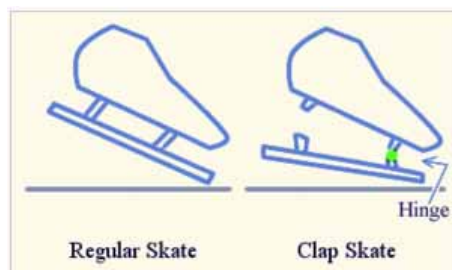


「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

<スラップスケート(slap skate)>

スラップスケートは、つま先とかかと部分の両方で刃(ブレード)を固定していた従来のスケート靴(ノーマルスケート)と異なり、氷を蹴る時にかかと部分が刃と離れ、キックした後にバネ仕掛けで戻る仕組みとなっているスケート靴である。



スラップスケートは、かかとが上がっても刃が氷に接しているので長く氷に力を伝えら

れることから、足首の可動範囲が広がり、疲れにくいことなどの利点がある。

スラップスケートはオランダで開発され、長野オリンピックの直前に登場したため、スラップスケート習得の差が、メダルの獲得に左右されたとも言われている。

現在のスピードスケートでは一般的に使用されている。

### 春秋：「金をとるまで」(2/17)

バンクーバー冬季五輪で日本人メダリストを2人出したモーター製造の日本電産サンキョーは、2003年度まで3年間、赤字続きだった。当時の社名は三協精機製作所。精密モーター大手の日本電産が買収し、息を吹き返した企業だ。

すぐやる、必ずやる、できるまでやる。日本電産の永守重信社長は長野県の三協精機に毎週通い、目標をあきらめない永守流を社員に説いて回った。30坪(約100平方メートル)の工場を、ハードディスク駆動装置のモーターで世界首位の企業に育てた経験を、三協社員にぶつけた。1円の無駄にも目を光らせた。

そうした永守流が、スピードスケート男子500メートルで銀メダルをとった長島圭一郎選手、銅メダルの加藤条治選手に乗り移ったかのようにだった。前回のトリノ五輪ではメダルに届かなかった2人が雪辱を果たした。トリノでは13位に終わり、今回も1回目6位だった長島選手には、永守さんのような粘りがあった。

「1位」にこだわる永守さんは、「金メダルをとってこいよ」といって選手を送り出した。「銀と銅でも不満かもしれない」という声が日本電産サンキョーであがっている。たぶんそうだろう。再建中も、永守さんは士気を考え、スケート部を廃部にしなかった。「金をとるまで頑張り」と思っていることだろう。

#### < 永守重信 (1944-) >

日本電産の創業者。京都府向日市生まれ。職業訓練大学校(現在の職業能力開発総合大学校)を卒業。

ティアック、山科精器を経て、ティアックの持ち株を元に1973年7月、社長を含めて4人で日本電産を創業。以後日本電産の代表取締役社長として、同社を、日本を代表する小型モーターメーカーに育てた。



優れた技術を持つが経営不振に陥った企業を次々と買収し、子会社化して再建させることで知られる。

著書に『奇跡の人材育成法』『人を動かす人になれ』『情熱・熱意・執念の経営』『日本電産 永守イズムの挑戦』など。

### 天声人語：「日本勢初のメダル」(2/17)

どこの湖の冬だろう、彫刻家で詩人の高村光太郎に「氷上戯技」という短い詩がある。さあ行こう、あの七里四方の氷の上へ／たたけばきいんと音のする／あのガラス張りの空気を破って／隼（はやぶさ）よりもほそく研いだこの身を投げて／飛ぼう／すべろう。

昔の少年たちの歓声が聞こえるようだ。時代は違うが、この2人も冬には、氷雪と戯れる子ども時代を過ごしたのかと想像した。スピードスケート500メートルで銀メダルを手にした長島圭一郎選手と、銅の加藤条治選手である。

長島選手は雑草タイプらしい。前回のトリノ五輪では惨敗して泣いた。「力もないのに出て、打ちのめされた。恥ずかしくて死にたくなかった」と言う。タイムより勝ち負けにこだわる哲学は、野天の真剣勝負師を思わせるものがある。

加藤選手も前回、期待されたが6位に沈んだ。その後車を買って、ナンバーを「3399」にした。世界初の33秒台への決意というから、こちらは技を研ぎ澄ます求道の人か。どちらも恥辱と屈辱をばねに、日本勢初のメダルをもぎとった。

残念ながらフィギュアでは、ロシアに国籍を変えた川口悠子選手のペアが4位に終わった。移り住んで8年、「ペアはロシア人の誇りなんです。それが分かってきた」と言っていた。だがスロージャンプで転んだ。

獲物追ふ豹（ひょう）にも似たり女子フィギュア氷上リンクの轍（わだち）すさまじ。朝日歌壇に載った淵上範子さんの作だ。ペアとて同じ、そして銀盤の傷痕は栄光と悔恨の証人でもある。3位と4位の間非情な距離をあらためて思う。

<高村光太郎（1883-1956）>

本職は彫刻家・画家。『智恵子抄』等の詩集が有名になり教科書にも掲載されるようになったため、詩人として認識されることも多い。東京府下谷区（現・東京都台東区）出身。東京美術学校（現・東京藝術大学）卒業。

在学中に与謝野鉄幹の新詩社の同人となり『明星』に寄稿。

1906年より留学に出て、ニューヨークに1年間、その後ロンドンに1年間、パリに9ヶ月滞在し、1909年に帰国。

旧態依然とした日本の美術界に不満を持ち、パンの会に参加し、『スバル』などに美術批評を寄、1912年には岸田劉生らとヒュウザン会を結成、芸術の自由を宣言。

作品に詩集『道程』『をぢさんの詩』『暗愚小伝』、歌集『白斧』、美術評論『緑色の太陽』『印象主義の思想と芸術』、随筆『某月某日』『独居自炊』『山の四季』など多彩。



### 編集手帳：「小石のおかげ」(2/20)

綱渡り芸人の男が、やはり旅芸人のヒロインに語る。どんなものでも、何かの役に立つんだ。たとえば、この小石だって役に立っている。空の星だって、そうだ。君もそうなんだ。

イタリア映画の名作、フェリーニ監督『道』の一場面である。映画の名せりふを集めた和田誠さんの『お楽しみはこれからだ』(文芸春秋刊)から引いた。

右ひざのじん帯断裂、手術、リハビリ...険しい山坂も彼には、競技者の精神を磨く砥石として役に立ったのかも知れない。バンクーバー冬季五輪フィギュアスケートで『道』の音楽に乗せ、高橋大輔選手(23)が男子悲願の「銅」に輝いた。

織田信成選手(22)の姿に、胸を打たれた人も多かったはずである。演技の途中で靴ひもが切れ、おそらくは泣き出したかったろうに、持ち味のコミカルな動きを最後まで演じきった。励ましの拍手の中で演技を終え、「ありがとうございます」、唇の形がそう動いたのを忘れない。

何のいたずらか、4年前、銀盤の神様が靴ひもにぶつけた「小石」のおかげで今がある  
何色かのメダルを胸に、そう語ってくれる日がくると信じている。

<フェデリコ・フェリーニ(1920-1993)>

映画監督、脚本家。「映像の魔術師」の異名を持つ。イタリア・リミニ生まれ。

高校卒業後、新聞社に勤務し、古都フィレンツェや首都ローマで挿絵や雑文を書く。



その後、ラジオドラマの原稿執筆などを経てロベルト・ロッセリーニ監督の映画『無防備都市』のシナリオに協力。同作品はイタリア・ネオリアリスモ映画を世界に知らしめた記念碑的作品である。

1950年アルベルト・ラットウアーダとの共同監督で『寄席の脚光』にて監督デビュー。1952年の『白い酋長』で単独監督。三作目となる『青春群像』(1953年)でヒットを飛ばし、ヴェネチア国際映画祭で銀獅子賞を受賞。続く『道』(1954)では世界的なヒットを飛ばし、国際的な名声が確立する。

その他作品に『結婚相談所』『崖』『カピリアの夜』『甘い生活』『誘惑』『魂のジュリエッタ』『悪魔の首飾り』など多数。

### 余録：「男子フィギュア初メダル」(2/20)

世界最古のスケートクラブは18世紀半ばにスコットランドで生まれた。入会には二つのテストが行われた。一つは氷上に完全な円を描くこと、もう一つは氷上に置いた三つの帽子を跳び越せることだったという。

より洗練された氷上の演技を競うフィギュアスケートの世界大会の初開催は、時代も下り1896年だ。わずか4人の選手を5人の審判が採点してドイツの選手が優勝した。大会は毎年行われたが、第7回大会でちょっとした騒ぎが起こる。

英国の女性が参加申請をしたのだ。実はそれまでフィギュアスケートは男性の競技というのが常識で、性別を指定した大会規定がなかった。激論の末に出場した女性は2位になる。女子の大会ができたのは、その4年後のことだ(日本スケート連盟編「日本のスケート発達史」)。

1932年のレークプラシッド冬季五輪のフィギュアに日本が初参加した際も選手団は男子だけだった。なのに以来、表彰台に縁がなかった日本男子である。悲願のメダルはようやくバンクーバーで授けられた。高橋大輔選手が失敗を恐れぬ気迫の演技で勝ち取った「銅」である。

ひざの故障からようやく復活した高橋選手の今季だ。まだ成功率の低い4回転ジャンプに勝負どころで挑んだのは、もちろん「金」を狙ってだ。その気合は転倒後も全く動揺のない表情豊かなステップやジャンプをも支え、会場を魅了した。

トリノ五輪では気の弱さを「ガラスのハート」と評された高橋選手の4年後の変身であった。歴史では先行した日本の男子フィギュアがようやく面目をほどこしたところで、ここは実績で先行する女子の活躍に一層期待がふくらむ。

#### <レークプラシッド冬季五輪>

1980年2月13日から24日までアメリカ合衆国ニューヨーク州のレークプラシッドで行われた冬季オリンピック。

スピードスケートでアメリカのエリック・ハイデンが5種目完全制覇の偉業を成し遂げ、アイスホッケー競技では、それまで4連覇し無敵と称されたソビエト連邦チームを準決勝で破った大学生で構成されたアメリカ合衆国チームが20年ぶりの金メダルを手にし、氷上の奇跡と称された。



当時のアメリカ大統領ジミー・カーターが、レークプラシッド大会終了後、昼食会に招いた五冠のハイデンやホッケー選手らから、同年夏のモスクワオリンピック・ボイコットの方針に対し、反対を表明されたことで有名。